

Nara Women's University

妊婦の社会学—現代日本における健康の制度化と妊 娠期女性の「食事实践」—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 島岡(大淵) 裕美 公開日: 2013-10-24 キーワード (Ja): 社会学, 食事, 制度, 妊婦 キーワード (En): 作成者: 島岡,(大淵),裕美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/3496

論文の内容の要旨

氏名	島岡(大淵) 裕美
論文題目	妊婦の社会学—現代日本における健康の制度化と妊娠期女性の「食事実践」—
内 容 の 要 旨	
<p>本論文は、国民の再生産としての営みでもある妊娠が、健康の制度化が進む現代社会において国家や医療専門家・地域社会・家族・当事者自身にとって、どのように位置づけられ、意味づけられているかを社会学の視座から解明するものである。特に、医療社会学や家族社会学の知見に加えて、教育社会学における「パーフェクト・マザー」論を援用して「パーフェクト妊婦」概念を創出し、妊婦の「食事実践」のあり方に注目し調査研究を行なっている点に特徴がある。</p> <p>各章の内容は下記のとおりである。</p> <p>序章 「妊婦の社会学」のためにでは、妊婦の社会学的研究の可能性を明らかにするための、対象・視点・問題設定が論じられている。具体的には、妊婦研究の社会的意義についてふれ、本研究が対象とする現代日本社会特有の「健康の制度化」と、具体的な視点としての食事について説明し、さらに妊婦をめぐる社会的状況を概観した上で、本研究の問題関心について述べられている。</p> <p>第Ⅰ部 理論と方法</p> <p>第1章 妊娠・出産研究の到達点と本研究の視座では、本研究が対象とする、妊娠・出産研究の到達点と課題を整理した後、現代特有の妊娠経験の意味や課題をつかむために、教育社会学における「教育する家族」・「パーフェクトマザー」論を適用し、「養育する家族」「パーフェクト妊婦」概念の可能性が提示される。また、妊婦と「食」に関する既存研究の到達点と課題を整理し、ブルデューをはじめとする「実践」概念を踏まえ、たうえで、「食事実践」について概念規定がなされている。章末では妊娠期特有の「三方向の配慮」が提示され、本研究の課題が明確化されている。</p> <p>第2章 対象と方法では、序章と1章で示された研究課題を解明するために用いる方法論と対象に関する記述がなされている。</p>	

具体的には、「トライアングレーション」に代表される、複数のデータや調査法を組み合わせる研究手法の意義について述べた後に、質的研究における調査者の当事者性・非当事者性に関する議論を概観し、筆者のポジショナリティが明示されている。末尾では、各章で用いるデータや対象者の概要について詳述されている。

第Ⅱ部 妊婦と食をめぐる制度的制約

第3章 妊婦と食をめぐる歴史的変遷——母子健康手帳の栄養の記述を中心に——では、母子健康手帳における栄養の記述の変遷を事例に、国家の母子保健政策が、医療システムや行政の影響を受けながら、どのように妊婦の健康管理を進めてきたのかが検証されている。

第4章 出産の医療化論再考—「妊婦中心の健診」と助産師教育・卒後研修にみる女性の抵抗の限界—においては、ヘルシズム論の視点から、助産師の再生産システムの検討を通して従来の出産の医療化論の再考がなされている。

第Ⅲ部 妊婦の実践を規定する知識的制約

第5章 妊娠期女性の食事実踐の研究—「パーフェクト妊婦」と情報収集—では、資源的制約の一つである情報収集・活用に注目し、高学歴女性たちがいかに情報を取捨選択しながら、胎児の養育責任と自分のニーズとの間で折り合いをつけ、自分たちなりの「パーフェクト」を目指しているのかが明らかにされている。

第Ⅳ部 妊婦の食事実踐への状況的・技能的制約

第6章 妊娠期女性の飲食物摂取における諸相—「食事戦略」のメカニズムに注目して—では、妊婦個人の逸脱的な摂取行動が、どのようなメカニズムによって生じるかが検討されている。医学的な監視の程度や、就労状況の変化に影響を受けながら、内食・外食、主食・間食という日常的な食の場面に応じた使い分けが存在し、飲食物の意味が、状況に応じて組み替えられていくことが示された。

第7章 調理にみる妊娠期女性のアイデンティティのゆらぎ—ある初産婦の生活史と食事日記より—では、あるひとりの妊娠期女性の日記と生活史をてがかりに、その調理実践に注目することにより、「母としての責任」をめぐる妊娠期女性のアイデンティティのゆらぎが検証されている。

第8章 妊娠期女性の飲食物摂取と共同食—自己コントロールと社会関係に注目して—においては、夫や友人、親戚などの他者との共同飲食が妊婦の飲食物摂取に与える影響について、糖尿病患者に関する食事実踐の知見を援用しながら検証されている。

第Ⅴ部 空間的制約と妊婦の実践

第9章 医療過疎と少子化のエスノグラフィ—奈良県南部を事例に—では医療機関への距離という地理的制約が、妊婦の食の実践にどの程度影響するのか、という問いの解明が目指されている。農山村地域の女性たちは、妊娠中の異常や、胎児にとっての同級生の有無、新規居住先である過疎地の生活への適応といった食生活以上に大きな困難を抱える場合、食事の節制は相対的に疎かになることが示された。

終章 「妊婦の社会学」の可能性と展望では本論文の議論を要約し、「食事実踐」と「パーフェクト妊婦」概念の有効性が検討されている。また、ライフコース研究における「妊娠期」の解明と、「妊婦の社会学」の可能性と展望についても論じられており、末尾では、本研究の学術的意義について説得的に主張がなされている。

論文審査の結果の要旨

氏名	島岡（大淵） 裕美
論文題目	妊婦の社会学—現代日本における健康の制度化と妊娠期女性の「食事実践」—
要 旨	
<p>妊娠という現象は、個人的／身体的事象であるとともに、社会的・文化的に規定される部分も大きい複合的現象である。構造的にみればそれは、人口の再生産に直接的にかかわる事柄でもありながら、この妊娠を担う「妊婦」という存在に関して、社会学の立場から包括的にとらえる研究は乏しかった。</p> <p>本論文はこの状況を打破し、健康の制度化が進む現代社会において国家や医療専門家・地域社会・家族・当事者自身にとって、妊娠がどのように位置づけられ、意味づけられているかを解明するものである。その際、教育社会学における「パーフェクト・マザー」論を援用して、「パーフェクト妊婦」概念を創出し、妊婦の食事実践のあり方に注目し調査研究を行っている点に独創性がある。</p> <p>論文を構成する各章は、以下の諸点において高く評価される。</p> <p>序章においては、本論文の問題領域が明確化されている。食を通じた妊婦の健康管理とその実態の把握を通じて、ソフトな健康管理の手段である「食」の意味を複層的に理解し、妊婦が置かれた社会的世界の解明を目指すというものである。</p> <p>第1章では、「パーフェクト妊婦」「食事実践」概念により、構造的な側面と、妊婦自身の実践的な側面の双方を踏まえた実証的検証が可能であることが示されている。また、既存の医療社会学の枠組みにとどまらず、教育社会学や家族社会学、地域社会学などの知見や分析枠組みを積極的に援用し、領域を越えた新たな社会学的視点の析出ができることも説得的に示されている。</p> <p>第2章では、さまざまな調査方法を組み合わせることの意義のみならず、調査主体の当事者性にかかわる認識論上の諸問題に関しても、丁寧な議論が展開されている点が評価できる。</p>	

第Ⅱ部にあたる第3章では、母子健康手帳における栄養の記述の変遷が取り上げられる。その結果、栄養というソフトな健康管理の手段が、どのように女性の生殖を統制し「パーフェクトな実践」へと水路づけようとしているのかという問いを、歴史社会学的な手法を用いて解明した点に意義がある。これは従来の研究においても手薄な課題である。

第4章では、助産師による妊婦健診が、正常な妊娠経過をたどる女性にとって「脱医療化」ではなく「医療化」を徹底する作用があると結論づけている。2000年代以降における、妊婦の健康管理の重要な手段である妊婦健診が、どのような教育再生産システムの下で変化したのかを検討することによって、従来の「出産の医療化論」を再検討した点が評価される。

第Ⅲ部の第5章では、助産師による妊婦への助言が、国家や医療がめざす理想的な食事実践へと促す根拠となるだけでなく、女性のニーズを満たすための実践の後ろ盾にもなるという二重の作用を果たすことが示唆された。特に、情報収集の一類型である〈達観型〉は、現代に特有のリスク社会的な状況において、胎児の養育責任を妊婦以外の他者や社会に広げるための新しい可能性を示唆するものとして注目される。

第Ⅳ部の第6章は、「食事戦略」のメカニズムに注目することにより、女性たちが、医学的な管理強化に対して従順に従うだけでなく、むしろ、状況に応じて飲食物の意味内容を変化させながら、場合によっては逸脱的な摂取を行う様相が明らかになった点に価値がある。

第7章では、あるひとりの妊娠期女性の日記と生活史を詳細に検討するという方法に獨創性がある。その結果、食に関わる「母としての責任」の問題は、調理に関する規範の内面化と技術の習得度という両側面から検討されるべきであることが発見されている。さらに、アノミーに関するマートンの類型を援用することで、「同調」「革新」「儀礼主義」「逃避主義」「反抗」という、新しい視点からの妊婦の類型論を提出しており非常に興味深い指摘である。

第8章においては、近い関係の他者との共同食の場面で、他者は妊娠期女性にとって逸脱的な摂取行動を監視する働きもあれば、「悪いものの摂取」を引き起こす働きもあるという両義的な作用があることが見出されている。

第Ⅴ部にあたる第9章では、医療機関への距離という地理的制約の妊婦への影響が独自の調査にもとづき論じられている。従来の研究では、病院施設から遠いほど、妊娠中の健康に配慮がなされると指摘されていた。しかし本研究では、「食材のアクセス」「医療機関へのアクセス」「準拠集団としての同世代の友人・子どもたちへのアクセス」が相対的に困難な地域に居住する女性たちほど、胎児の健康管理への意識が働きにくいことが示唆された点に意義がある。

終章では、「パーフェクト妊婦」概念と「食事実践」概念の有効性が説得的に検証されている。特に、胎児の養育責任の「個人化」の条件や仕組を示した上で、「胎児のケア」を社会へと開く〈社会化〉の可能性が示されている点が重要である。さらにそもそも妊婦とは、胎児という刻々と変化する存在を身体内に宿している点に大きな特長があるが、このような、近代社会の個人概念から抜け落ちてきた両義的な人間像を正當に位置づける社会理論の構想という、野心的な見通しも示されている。

なお、本論文は社会生活環境学専攻社会・地域学講座の社会学分野の学位取得基準を満たしている。特に第4章の内容は、国内の権威ある社会学学術雑誌『ソシオロジ』に査読をへて掲載されており、妊婦の社会学という新しい分野の今後の進展が大いに期待される。

よって、本学位論文は、奈良女子大学博士（社会科学）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。